

何百とも云へぬ多くの登山者も口々に讚歎の聲を上げてゐた。眞紅の太陽は尙も上る。そしてその圓い姿をコバルト色に晴れてゐる大空へ現はした。

かくして八月二日の夜は明けたのだ。

やがて僕達はほい、笑む太陽の光を背にうけて、黎明の伊吹を多くの登山者の群にまじつて下山の途についた。ひんやりとした朝霧が再びそのぼんやりした姿で下の方をつゝんでゐた。

## 歳末の頃

二年 佃 精一

學期末の試験も漸くすんだ土曜の晩は、十六燭の電燈の光は馬鹿に明るく輝かしく見えた。弟の新年號少年俱樂部にしばし慰安を求めちろ／＼落ちる算のさゝやきに誘はれつゝいつしか深い眠に陥つた。

『おばさん、えびを安うしごきますが買うておくれ……』心をひかれてはね起きて見れば僕位の少年が母にしきりと賣を求めて居る。未だ明けて間のないこの朝寒さに健氣な少年同輩頃の君の姿を見た時僕は一種の云ひ知れぬ感にうたれたあゝ年の暮か。

れるのである。私の學校生活中印象の最も深いものゝ一は此の時の感想である。これは單に私獨りの感じではあるまい。恐らく過去に於て猶將來も初めて此の門をくゞる者の等しく持つ感想であらう。

嚴肅な心持の對象となる校門も、喜びに高鳴る胸を抑へつゝ浮立つ足を踏みしめつゝ通る新入學生には、又喜びと祝意を表はして呉れる。昨日の何だか恐ろしい氣持のする門は今日は楽しい我等の門である。コツ／＼と靴の音も凜々しいあこがれの上級生と肩を並べて通り過ぎる時、未だ制服に身固めなくとも立派な中學生になりすまして居る我を感じるのである。

奮闘の五ヶ年も夢と過ぎて懐しき先生と袂を分つ幾十の卒業生は感慨なくして此の門をくゞる事は出来まい。前途の希望に心躍る人々でも、これが最後と思へば一度は顧みずには通り過ぎる事は出来まい。殊に卒業して久々同級生と學校を訪れる時なき云ひ難い懐古の心を先づ誘ふ者は校門でなくてはならぬ。

申すも畏き極みであるが、嘗て 大正天皇が湖東の野に、近畿の將兵を御統監遊ばられた砌、其の大本營として陛下をお迎へ申上げたであらう此の門を思ふ時、私の校門に對する感想は益々深みゆくのを感するのである。

七百に餘る我々彦中生は日毎に此の門を無意義に通るべき

數日來荒れ狂つた雪空も今日ばかりはやわらいですぎとほる様な光線は残りの大根畑に靜かに訪れてゐた。僕は庭の一角に立つた。骨ばかりの櫛を通し荒神の頂を美しく眺めた時五位鷲の一群はゆるやかな羽波を描いて山の向ふにかくれた。南は明るかつた。

自轉車の修繕に巡禮街道を北へ走つた。風はまだ一つもない。忙しさうな馬車に出會つた。一群、二群うば車、マントの人、母に手を引かれつゝいそぐ林檎の頬をしたる子供、等々師走の買物に彦根へ出かけるのだらう。福引の獲物を求める行人の心持を想像した。

仕事部屋の片隈に母は干大根の始末に忙しい。あゝほんたうに年の暮が來たのだ。

## 校門

二年 細川 常雄

日毎に七百に餘る彦中健兒を送迎する校門、これこそ彦中にゆかりある者の等しく忘れんとして忘れる事の出来ない印象として長く各自の脳裡に刻まれるものゝ一つであらう。

おのゝく幾百の入學志願者には、如何ばかり此の門が嚴めしく感ぜられ、校門から立關へ姿の消えゆく先生の後姿の如何に尊く思はれる事よ。私は往時を偲ぶ時、無量の感に打たるものではない。必ずや朝に夕に淨化の洗禮の關門としてくゞりたいものである。

## 彦中生活片々

二年 一 谷 道雄

徳川の後期から幕末へかけて井伊の居城たりし金亀城下の一廓に鬱蒼たる城山の老樹を背景として、堀に臨んで建つは吾等の學び舎、彦中の校舎で有る。建築物は必ずしも輪換の美を誇るに足らないがこの學び舎から幾多の英才を輩出して春夏秋冬將に五十年にならうとして居る。今や我が滋賀縣下には、中等學校の種類も數も少くないが、半世紀に垂んとする古い歴史を有するものは極めて少い。僕はこの古い歴史有る本校に非常なる愛着を感じる。殊に大正六年の秋には本縣で陸軍特別大演習の行はれた際本校を畏くも大本營に充てさせ給ふた。今尙當時の御座所がそのまゝに保存されて有る。此の光榮を思ふ時、一入感激と愛着と、一種の誇りとわが身の幸とを覺えて自ら胸の高鳴る様な思がする。この光榮ある本校の歴史を汚さざるのみか一層榮を有らしむべき更に一頁の歴史を増補するのは僕等の忘れてはならぬ責務だと思ふ。

## 二、校庭

花園にはグリア・バラ・コスモス等の秋の花が白、赤、紅

とその美しい花びらを秋の陽ざしにむけて、うつとりと夢みるやうに亂れ咲き堤には老松、若木が大枝小枝をくみ合せ鬱蒼とした茂りを見せた夏の頃よりは何らかうら淋しい感じを抱かせてその幾葉かを地上にほろ／＼と撒き散らせてゐる。方圓には大蘇鐵が鐵腕の如く永い本校の歴史を物語るやうに勢よくみづ／＼と生長し運動場の大銀杏もや、黄色づきゆう然として壓するが如くに高く清淨なる空へ憧れてゐる時たま吹く微風にその葉をそよがせる音がまるで豪傑笑ひをしてゐるやうだ。初秋の日が微笑してゐるが如くに暖かく輝く中に或る者は鐵棒に戯れ或る者は木蔭で宿題を解き或る者は砂場で中跳をし野球をし嬉々として戯れ二、三十分前の静けさは何處へやら今はバスの聲、テノールの聲入り亂れてさながら若人の樂園だ。この元氣潑洩たる我等のグラウンドの空に飛び交ふ鷲も眞澄めるコバルト色の大空を征服し小さく大きく舞ひながら大地に影をうつし行く。

### 三、嚴肅

サイレンが高く校内の隅々に鳴り響くと全生徒はこの合圖によつて運動場に整列して静かになつた暫く経つと先生方がこれ第二のサイレンを合圖に五年生の級長の『氣をつけ』の號令に誰も心は引締り一層静けさが増し嚴肅な心持こなつた『脱帽』……『禮』……の聲が朝風にのつて聞えると同時に頭がスーツとなり同時に全身が洗ひ清められたやうな氣

つた早速裏に行つて花を取つて活けしばらく見とれてゐた。その夜の事である電氣をさげようとした瞬間ふとしたはづみに柱掛は下に落ちた、花と水は投げ出され机にあつた部分にかけて無残な廢物になつて散らばつた。それはほんの寸分の出來事である。僕の心を美しくさせたのは、わづか半日ほどだつたその間は何と短いものであらう。京都からはる／＼彦根にきてすぐに廢物になつてしまつた。

花掛も悲しんでゐるかも知れない。しかしこれも運命がそうなつてゐただから仕方がない。悪運といふものを脊おつて出來たのであらう。此の無生物の此の小さい柱掛にも、運命といふものが巡つてゐる。あの去年の物凄かつた風水害に死んだ大勢の人々は皆悪運がついてゐたのであらう、人間がどうすることも出來ない皆運命であるからたとへ悪運に會つてもあきらめるより仕方がない。僕はいつも不思議な運命といふものを考へさせられる。悪運がなければよいのに、妹の死でもこれが運命だと思つてあきらめやうとしてもあきらめられない。まして不意に旅先で死んだ人の事等は一生その死んだ時その土地にいかなければよかつたのに、もう一時間後にせばよかつたのに、といろ／＼ぐちを並べたらうと思ふ。さうなるとただ悪運だといつても云はずしくなつて來る。

しかし世の中には、又反對に善運につかれて、自分の能力

持になつて誰も身動きするものもない眞に嚴肅なる此の一瞬——『休め』の號令に我に返へり周圍を見廻すと空も木も人も皆眠から醒めて晝の活動に向つて歡喜の聲を上げてゐるかのやうに見えた。

### 四、考查

考查！それは生徒にとつて最大の苦しみてある。もし平素善根をつんだものが極樂に行けるなら平素勉強をしてゐるものは試験こそ考查の門であるしかし毎日遊びくらすものは丁度忘けるものが月末に狼狽しても間にはないのと同じことである。今更ながら考查の恐ろしさをしみ／＼としる時である。

教室より平然と出て來る者もあれば頭を掻き／＼やつて來るものもあり又大成功と言ふ顔付でにこ／＼しながらやつてくるものもあり慌しく走つて來てノートを開いて見たり友達に聞いて自分の誤りを覺つてしよげ返へるものもあり又跳り上つて喜ぶものもあり嬉悲交々の様があちらこちらに見られる。

### 運命

二年 淺島 浩 二

休暇中の或る日の事僕は祖父に清水燒の美しい柱掛をもら

でし／＼出世して行く人もあるのだ。悪運あればこそ善運もある。悪運だからこゝろなげかすきつぱりと男らしく一心に何事にもよらず努力すれば又善運はやつて來るのであらう。

### 江の島巡り

二年 横田 不二夫

片瀬へ來て以來降り續いた雨が、今日はからりと晴れ渡つて、日本晴になつた。お天氣でおまけに日曜日なので東京近邊から今夜の萬靈供養の燈籠流し花火を見んものとぞく／＼押し掛けて來る人々で此の小つぽけな海岸町片瀬も早朝より異常な緊張——賑はひを呈してゐる。

書生の宮本が東京から來たので、二人連れて江之島に行くことになり極く輕装で岳洋莊を出て。人混みを縫ふが如くにして江之島へ渡るべく棧橋へと急いだ。棧橋の袂にある守衛の屯所で棧橋料を拂ひ、橋上に徐ろに足を運んだ。左方海水浴場を見ると流石暑いだけに、河童連で一つ杯だ。其の間々に赤、青、黄等の色日傘が點綴して華かな空氣が漂つてゐる。さうかうする中に棧橋も渡り切つてこんもり茂つた深緑の山が目前に迫つた。土産物を賣つてゐる店々の軒下を通り抜けると涼しい山道に出た。樹々の梢の間に小つぽけな片瀬の

町、片瀬川、古い形容ではあるが一面に青疊を敷き詰めたやうな相模灘等、繪の様に優美な風光が眼下に一望される。その青疊敷く相模灘の上を習々として渡り来る涼風が袖を漏れてほくをなてる。左に右にうねつた山道の涼味を味はひながら歩を進めてゐる中にやがて奥津宮の境内に入つた。御手洗の水に心の隅まで清めて神前にゆかづき、頭を垂れた。江之島神社は縣社にして邊津の宮、中津の宮、奥津の宮の三社に分たれ、多紀理比賣命市寸島比賣命多岐都命の女神を祀り、日本三辨天の二に數へられ諸種の神寶も多いこの事である。奥津の宮より石段を下りると、昔、稚兒白菊が「白菊を偲ぶ里の人間はば思ひ入り江の島に答へよ」との絶句を残して投身せりと言ふ傳説のある稚兒ヶ淵に出た。昔は此の附近も海水の蔽ふ所であつたが、今は水も去つて、平なる岩石より成つた平原様になつてゐる。遙か西方東太平洋の大海原から押し寄せる巨浪に煽りをくらつて、蒼波が波渦を巻き、岩頭に花と散る光景は壯快言語に絶する味はひがある。遠くは大島を望み、頂上近くほんのり雪化粧をした靈峰富士を仰ぐ。近くは眞帆、片帆の漁船が點景し、岸近く乗合船が往來する。絶世のパノラマも見終つて姐岩を過ぎ、丹塗の勾欄を添へた棧橋を渡ると一大洞窟に達した。洞窟の手前で拜觀料を拂ひ洞窟内に入つた。此洞窟は窟口の高さ七間余、深さ四十間ある由、いかに天然とは云へ驚歎せざるを得ない。昔役小角天

だ耳に残つてゐます。今夜は燈籠流しでせう。不二夫のお参りする前お母さんはもう来てゐらつしやるでせう。……讀み終つた僕は、今は亡きお母様が生前江之島が大好きであつたとお聞きして、一入感慨深きものを覺えた。さうして早速今日の事をお父様にお知らせした。

### 賤ヶ嶽に立ちて

二年 實意 敬造

僕は流れる汗を拭き、峯を撫でるそよ風を受けながら琵琶湖の北端賤ヶ嶽山上に立つてゐた。空はさんよりとして、連なる山々は高く低く又湖岸にせまり、湖岸線を縫ふ白い一すじの湖岸道路がことに目につく。琵琶湖の水はさながら鏡の如く黒い山影を横へ、竹生鳥がうすぼんやりと、そのまわりを小さな汽船が獲物をねらふ蟻の如く徘徊してゐた「静だ」木之本から来る自動車の汽笛と、時々妙な音を立て、飛ぶバツタの音のみだ。

『賤ヶ嶽の戦』これはあまりにも有名な戦だ。猿面冠者一代の運命を決した戦なのだ。僕はいつしか三百五十年の昔に立ちかへつて此の峯々に設けられた壘、そこにきらめく大刀、人馬のさけび、中川清秀の奮戦、七本槍の功績さては秀吉の金の采配をふつて、下知する勇ましき聲、等々、頭の中を

女を奉祀し空海、滋覺、文覺の諸上人が參籠せし所なりと言ふ。參拜を済まし本殿の横に廻ると、白い衣服に緋の袴を着けた十二、三の巫女姿の少女が蠟燭を賣つてゐる。これは第一奥の宮に入る時持つて入るものだ。僕等もそれを買つた。暫く行くと「ぼたり」と冷たいものが頸筋にあたつた。ひやつとして、さはつて見ると水だつた。人々は一種の異様な靈氣に打れて、誰一人話する者はない。暫く行くに道が二つに分かれてゐる。僕等は初め右に取つた。穴は小さくなり、腰を曲げてやつとこさで神前にゆかづき、禮拜した。さうして再び元の道にとつて歸し、先刻の分れ道の左方へ入つた。入つて行くのは僕等二人だけだ。禮拜を終へて戻りかけたが、誰一人入つて來ない。向ふで「さうぞお先へ」と言つて先を争ふにあらずして否後を争つてゐる。さうやら臆病風に吹かれてゐるらしい。

かくして第一、第二兩奥の宮の參拜も終へて歸宅した。江之島はさゞえが名物だ。別荘に歸るとお父様から此の間の返事が來てゐた。其の一節に

お天氣がよくまりましたから、江之島へ案内して頂きなさい。お母様は大好きでした。つぼ焼を御馳走し下頂きなさい。岩屋へ降りる最後の茶店でお母様と同級の大森さんと、つぼ焼を食べたことがあります。兩側の店より呼ぶ聲も未

走馬燈の如く駆けめぐり、勇しき追憶に耽つてゐた。僕は今此の古戦場に立つてゐるのだ。この足の下で互に奮戦して血潮を流したかも知れぬ、又名將の首を打ち取つて萬歳をとなへて喜んだ者もあつたであらう。がしかしその血潮を流した古戦場も三百五十年の風雨にさらされ今はその面影もなくたゞ勝つてかぶとの緒をしめよの油斷大敵をいましめた石碑がさびしく立ち、雲間から顔を出した日輪を仰ぎ、むかひ合つた青き山々、一樹一草も互に余吾湖に何日もかわらぬ己が姿をなげ、ありし昔の戦況を物語つてゐる如く思へた。

友も同じ追憶に耽つてゐるのであらうベンチに腰を掛けじつと彼方の山を見つめてゐた。  
『静かだね』僕は聲を掛けた。  
『全くだ』友は此の一語をのこして又々深き追憶に込つて行くのであつた。

### 伊吹山登山記

二年 中野修吾

七月三十一日伊吹登山の日は來た、都合良く快晴の空である。喜び勇んでT君の家へと急いだ。そして同所を出發したのは丁度午後九時半頃であつた。外は眞暗で螢がちらほら飛んでゐる。我等は懐中電燈を頼りに山麓上野村へと歩を進め

た。途中二ヶ所も墓地がありその兩側は林に圍まれて實に物凄。二人は互に勇氣を鼓してやつと通りぬけた。そして二三町行くと春照の村へ出る、もう此處迄來ると登山者は續々つめかけてくる。其の人々と一緒になつて漸く麓登山口に到着した。此處でゲートルを巻きなほしたりして十分に体を休めてから山を登り初めた。一合目は木によつて圍まれてゐるおまけに道は九十九折でなかくはかきらない。二合目あたりは廣い野原でスキー場として有名な所である。次は三合目から四合目へかけては平坦だからさ程骨が折れない、それから上へ五六七合目は坂が急だから登るのに困難であるが我まんに我まんを重ねて八合目にたどり着いた八合目から九合目へは岩石なきて道が大變けわしいその上急坂だし石にかじりつきて九合目まで来た。九合目からは道もよほさゆるやかでありその間隔も頂上に近づくにしたがつて短くなるのではや向ふに『頂上』とするした棒が休息所のガス燈でぼんやり照らされてゐる其れを見た時のうれしさは、何じも譬へやうがなかつた。二人は走るやうにして其處まで着いた。これで伊吹を征服したのかと思ふと小躍りしたくなる。休息所の人には『まあお休みを……さうぞ……』と言つてゐるやうだが、耳にも入れず測候所へ行つた。未だ空は暗く幾千萬とも數知れぬ星が眞珠をちりばめた、如くかゞやいてゐた。其の邊の草原に腰をおろしてジャケツを着た。登つて來た時の汗は何

時のまにやらさへさつて、反對に寒くなつた。そこで辨當をたいらげた。未だ夜が明けぬから二人は寢ころんだ。登山者も大分登つて來たらしいのか人の聲でやかましくなつたので起きて東の方へ行つた。東の空はほんのりとしらみかけた。多くの人々も先を競つてやつて來た。寒いからといつて火をたくもの、寫眞を寫さうとカメラを用意するもの様々だ。太陽はだん／＼とのぼつてくる、雲は焼けた様に赤くなつた向ふに高く聳へてゐるのが御嶽山だ。さうだもう太陽は雲の上のぼりきつてしまつた。

さあ皆の者は騒ぎだした。萬歳を叫んだり鉢巻をして躍り出したり蜂の巣をついた様な様子だつた。二人は大陽に一禮して騒ぎなきを見てゐた。大陽は天高く登つてしまつた。やがて多くの登山者は下り出した。中には珍らしい花を採集してゐる者も少くはない。我等二人は山づたいに東へ東へと行つてそして珍らしい藥草の二三種を採り頂上を全體見た後名残りおしくも下山し始めた。

### 街の紙芝居屋

一年 北澤 信 孝

今や腕白子供等がのつばらでちやん／＼ばら／＼の眞最中だ。『さあこい、我こそは鞍馬天狗、者共！東になつてか、

つてこい。』

石の上に片足ふんばつて棒切を大上段にふりかぶつてゐるのは近所で一番の餓鬼大将である。

之に向つて幕府の捕手がざり／＼とまわりからよつて來る鞍馬天狗は得意になつて無暗に刀をふりまはす。御用役人はばつた／＼と倒れて行く。まさに戰酣といふ處。

其の時遠くからカチン／＼と拍子木の音が聞えて來る、その音が微妙に腕白共の耳に響くのだ。僕等までへついつり出されてしまふ。腕白連はすぐさま劍戟を止め、ぎん／＼走つて行く。後には鞍馬天狗や捕手の刀が散らばつてゐる。

街の曲り角に紙芝居の自轉車がちよこなんと置かれてあるさ、やかながら、街の子供達の人氣を一身に集めて居る劇場なのだ。そこには腕白達の標的なる鞍馬天狗があるからだ。眞黒な顔をした腕白坊主が其前でわい／＼さわいでゐる中に、向ふからお待ちかねのおつさんの姿が現はれる。ねずみ色になつた黒ずばんに、メリヤスのシヤツ此れが又汗／＼垢／＼でさす黒い。

之が此の芝居劇場の社長なのだ。そして辯士であり、宣傳係でもあるおつさんなのだ。このおつさんが観客達の手から一錢銅貨を受け取ると、その驚くべき眞黒い手に飴を握らせ

てやる。

『明日はいよ／＼面白うなるぞ』  
おつさんは明日の分も宣傳してひらりと自轉車に飛乗るとぶ／＼と行つてしまふ。

子供達は名残惜しげに其後姿を見送つてゐる。七つ八つの

『幕末物語、勤王の志士鞍馬天狗第三編』  
辯士おつさんの聲が重々しくあたりに響く。

『淀川堤に出合つた鞍馬天狗と近藤勇、青い月の光に照されてつゝ立つてゐます、嵐の前の静けさ、犬の遠吠がかすかに聞えて來るう』

此處でおつさんは鈴を出してちりん／＼と振つた。その顔はだん／＼赤くなつて來た。

子供達の顔もだん／＼緊張して來る。

次第々におつさんの語氣は、はげしくなつて來て、観客達の目が輝きを増して行く。

『お、今や鞍馬天狗の運命は絶對絶命、新選組の鋭い太刀に圍まれて必死の色が現はれてゐる。』子供達の顔は異常に不安さうに並んでゐる『此の時遠くからカツ／＼馬蹄の響が聞えて來た。お、之ぞ正しく桂小五郎！』

子供の顔は言合はせた様にほつこする。

『え、ぞ／＼』眞黒い顔が興奮して大聲に叫んだ。

次から次へ観客の顔は色々に變化して、終に最高頂に達して終りを告げた。

影が、夕日に長くく伸びてゐた。

## 寫生

一年 小田 博

ぼつぼつ／＼と、向ふの方で音がきこえたかと思ふ忽ち「ごおうつ」と、いふ響に變つた。信號燈は青になつてゐる。汽車だと思ふともう入つて來た。東京行の急行だ。僕は思はず筆を止めて立ち上つた。そして數を讀んだ。「一二三……」三番目に食堂車、四番目に二等車がくつついてゐる。車窓には男の顔や女の顔、赤いのや白いのや、色々の顔がのぞいてゐる。

「ガタツ」「ガタツ」汽車は速力をままして次第に小さくなつて行つた。空はコバルトに澄んで眞に秋らしい。

又筆を取つた。佐和山の色がよく出ない。黄色をといいた。春の山になつた。さうも夏の山は書きにくい。黄の中へ青と黒をませた。今度は本當に夏らしくなつた。後で誰か「線路の色を濃くするとよくなるよ」と云つた。何時の間にか鐵道省の小父さんが來て見てたのだ。

近鐵の機關車が荷物の引き揚げ所へ入つて來た。

「ぼつ、ぼつぼつぼつぼつ」近鐵の機關車の聲だ。ぼつと一つ、次に續いて四つピストンの音が響くのだ。

あたりは未だごく静かだ。遠く近く鶏が朝の合圖をするのが聞える。

私は此等の單調に代る／＼響いて來る自然の朝に耳を傾けつゝ歩いた。

しばらく歩くと山へ行く一人の樵夫に出會つた。田へ働きに出て行く人が我が家の前を通り去るのが見える。あゝかうして次第に「人間界の朝」の活動が開始されて行く。

## 月の満ちた夜

一年 保 滌 義 亮

歩いてゐた。

獨り！ 唯獨り！ 深夜に――

そしていつか村の最初の橋の下を水の上を薄黒いものが音もなく通つてた。

見えなくなると……橋を通り抜けた傍に黒坊主が蹠つてゐた。それは僕だつた、僕の姿だつた。後の方では、かなしさうに鳴きだした蟲小さな蟲がさびしい夜を物語つてゐるかの様に……

はたと蟲の聲が止んだ。

前方の山頂に今出でんとする月が盆の様な月が希望に満ちた月が秘められた暗黒の世界を當に照らし出さうとしてゐる

僕は紙を身体でおぼた。煤煙が洋服から顔へかけて一ぱい飛んで來る。機關車は向ふへ行つた。

僕は思ひ出した様に筆を取つた。昭和セメント工場、千代神社、ふみきり等が次第々々に灰色に化してゆく。信號燈が明るくなり、電柱の力ない影は次第にのびてゆく。

「がた／＼／＼」下り列車が止つた。向ふ側が見えない。もう歸らうと思ひながらプロックをたゝんで用具をかたづけた。

自轉車に乗つた。暮色の彦根驛は淋しい。

後から聞えて來るものは人夫の淋しい聲ばかりである。

「よつさ、よつさ、／＼／＼」と。

## 朝

一年 保 滌 義 亮

私は獨り朝露を踏んで歩いた。裏山は朝霧に包まれうすばんやりミして未だ夢から覺めきらない。前の杉の木ではもう蟬が鳴き出した。裏山から單調な山鳩の聲が朝霧を通じて聞えてくる。燕は我もの顔で灰色の霧の中を元氣に飛び廻つて「チウ」「チウ」と一聲づゝ鳴いてゐる。時々蜂が「ブーン」と來て耳をかすめて行く。騒ぐ事の好きな雀が五六羽屋根の上を集つてやかましく囀づゝてゐる。

動くとも見えない五色の雲が去來する。と蟲の聲が又一切高く鳴り響いた。

## 愉快だつた一日

一年 松 田 又 一

八月二日、今日は晴天なので十時頃、獵師の舟で魚釣りに沖の方へ向つた。此の日はさゞ波、しかも南風で都合がよいので帆かけによつてさゞ波の上を走つた。やがて岸から一里も離れた處に舟を止め、目的の魚釣りにかゝつた。

先づ父が餌をつけて海底深く重りを投げ込みなまつた。道具は普通の釣竿ではなくて長い糸があり、重りを下して釣るのである。その中に、父が釣れたぞーといふやうな顔つきで糸を上げなまつた。ぴち／＼とはねまわつたのは、一匹の小鯛であつた。父は

「始めから鯛が釣れたて、げんがよいぞ」

と言つて皆を笑はせた。何くそ負けるものかと、僕も釣り出した、しばらくすると、ぐぐぐと大きな手ごたへがした。

「釣れたー」

と思はず大音聲で叫び、懸命に糸をたぐり上げた。大きな手ごたへがしただけに、大きなきすが二匹一緒にかゝつてゐた。僕の自慢は言ふまでもなかつた。今度は弟がびつくり

したやうに急に糸をたぐり始めた。見ると今までにない二十種ばかりもあらうと思はれる大きなきすが、はね上つた。こゝういふやうにみんながたくさん魚を釣つたので、魚釣りを止めて水島へ行つた。

水島に着くと直ぐ着物を脱いで、水泳をした。空には眞夏の日がきら／＼と輝きわたつて、砂の上を歩くと、足の裏が焼けさうだつた。飛込臺から海の中へ飛込んだ時の氣持は、言ふに言はれない程、よい氣持がした。水泳を終へて常宮へ向つた。

そこで釣つてきた魚を焼いて、晝食をすました。一時間程たつてから又水泳をした。常宮には五米ばかりの瀧があるので水泳がすむと瀧にうたれた。落ちてくる眞水の所へ頭をやると、頭をなぐられてゐるやうで、いたかつた。

大分遅くなつたので、仕度をし、舟に乗つて四時頃無事に岸へ着いた。

### 小田原にて

一年 柏島 敏男

わい／＼と人々ののゝしり聲、その聲荒れ狂ふ怒濤のうづの中に呑まれて行く、赤銅色の肌をもつ濱の漁夫があちこちで大きな聲で話しあつてゐる。シャベルの音をならしながら

ら幾人かの巡査が行つたり來たりしてゐる。「溺死人」さわがしい中から洩れる様に聞えてきた其の言葉、僕は人々に押されながらだん／＼と艇の傍によつて行く、溺死人。

あゝ恐ろしい、今にも溺死人の頭手足がこの一枚の艇を掻きのけて僕に飛か／＼と來さうな氣がした。見るのをよさうやめよう、僕はこの人ごみの中を出ようとあせつた。あせればあせる程僕の小さな体は艇の前にと押され近づいてゆく。その時一人の巡査がつか／＼と艇の前まで來たかと思ふと、のぞくように艇を取のけた「あ!!!」青白い顔 血の氣もない紫色の唇、顔はその溺死人の顔を少しの間隙からはつきりこみてしまつた。僕はその腰間無我夢中に人々の間をかきのけた。ふき氣がついた時僕の眼前には太平洋の大海原が横たはつてゐた。

今一人を呑みこんだこの土用の大浪も僕の臆した心を洗つてくれたのだ。大島も今日は灰色の空の中にぼんやりと見える。箱根の連山もぼろりと薄黒く見える。僕はすた／＼と砂をふみしめ山も一度今來た方を見たあの惨劇の場所も一本の濱旗が恰も今の溺死人を弔慰してゐるかの様にひら／＼と海風に吹かれてゐた。

× × × × ×

### 水 島

一年 坂田 保

水島行の船に乗る。船は水煙を立て、水島へ向つて突進する。すさまじい波を残して行く。海の色はすごい程濃い紺色だ。波一つない。やがて船は水島についた。

上陸して水泳着を着て海に入る。母とお寺のおばさんともちよちゃんも貝をこつてゐる。僕はとちよちゃんとお寺の子供と三人で泳ぐ。浅い所は日に當つて水は大へん暖く深い所は冷い。しばらく海で泳いで居ると母等がこられて上へ上れと備はれた。

上へ上るお父と寺のおおじさんとちよちゃんとお寺のいさんが來られた。

僕はとちよちゃんと濱で日に當つてゐた。砂は太變暑く太陽はじり／＼照りつける。日に當つて居ると暑いので木蔭へ來た。休んで貝を取らうとしたが大なる石や小さな石があつて藻の爲につる／＼して居り、大へん危険であるから止めた。父と母とお寺のおおじさんおばさんちよちゃんは貝をとつておられる誰も彼も一生懸命だ。とちよちゃんはさゞえの身をもらつてゐる。とちよちゃんのいさんは貝を取らずに休んで居られる。僕等は木蔭の涼しさにいつこなしに眠むくなつてねた

やがて皆があがつて來た。かごには貝がいつば盛つてある。「すばらしい大漁だ」と、僕が言つた。皆は貝をまる燒きにしてたべてゐる僕は濱へ出て遊んだり、そこら歩いて貝を探したりした。

島は松が一体に生えて居り、所々には潤葉樹もある。海岸の砂も一般の海の砂と異り、砂の色が處によつては色がかはつてゐる。紫色の砂もあれば白い砂もある。僕は不思議に思ふと共に興味といふことを本當に味はつた。水島はその向ふにある明神ヶ崎といふ岬より少し離れてゐる。僕は此の時水島は明神ヶ崎の續きであると知つた。水島はたゞ一島のみで數島の島がある。明神ヶ崎の傳説によると「でん」といふ動物がゐるといふ話だ。

水島からの四方の眺めはよく、浦底の村はげさやかに見える。お寺の庭に幟が上つて居り木々の間から屋根が見えるも一段の面白味がある。更に首を廻らして南を望めばつるがの町がかすかに見へさながら春霞の如く。東を望めば水津の村が見える。水津あたりの村々は緑の濃き所を青空に接してゐる様は何さなく美しく、氣持をさつぱりさせる。

皆は漁船に乗つた。漁夫が漕いでゆく。皆の顔は喜にあふれ浦底向つて船は行く。海の色は濃くなるころ水島は次第々々に小さく薄くなつてゆく。お寺の屋根もだん／＼はつきりする。僕は此の水島は敦賀灣の樂園であると思つた。

## 伊 吹

一年 西川 知一

八月三日夜久保田君と伊吹登山を決行することとし、九時十八分出発車中の人となる。長岡驛に下車、乗合自動車の便により春照村につく。こゝから上野へ行き、麓の神社へ参拜過ちなきやう祈る。いよく登山の用意をして、懐中電燈一つを頼りに登りはじめ。

険阻な坂であるから、なか／＼えらい。やつと一合目へ着いた。まだ時間は早い一休しやうと草の中に、腰を下して、腹ごしらへをする。見下せば、柏原村も夜の闇に閉ざれて、眠つてゐる。さあ、これからだと、勇んで、出發二合目、三合目とだん／＼頂上に近づく。一合目毎に約二十分かかる。伊吹登山はえらいと聞いてゐたが、さほぎでもない。九合目までくると寒くなつて来た。冬服を着用して寒さを凌ぎ、国旗辨當にぎりつく。さあ、後一合だ、勇氣百倍たう／＼伊吹を征服した。思はず萬歳を叫ぶ。頂上まで書いた標柱は特別大きい日本武尊の御像に謹んで、賊を退治して下さつた事を謝す。室に入つて暖まつてゐると、明るくなつたといふ人の聲に我先に出て見ると、東はほんのり明るい。見下せば左には濃尾平野が眼下に廣がり、右には琵琶湖沿岸の街の火が美しい。

と宿るあぜ道を急ぐ。はるかかなたに飛行機の音がかすかに聞えた。右の方を見る……。そこには森殿おのづから人のえりを正さずにはおかない様な壯麗とした景色を見た。太陽が「さあつ」と上つたのだ。尊い今日一日のスタートが切られたのだ。幸あれ！今日の飛行機はそれに呼應するが如くはな／＼しく旋回飛行を行つてゐる。機體を操縦する少年航空兵を想像するだに僕の小さい胸ははちきれさうだ。僕等はしばしそのあきることのない壯觀をながめてゐた。朝の清淨な爽快な微風は僕の心を真底から新鮮なものにしてくれた。これ等も朝早くおきることによつて味へる気分である。僕はこれより一そう早起しやうと決心した。

## 思ひ出

一年 西田 洋次郎

### 空中飛行

たしか五つ位の時だと思つてゐる。二百十日頃で風の強い時季だつた。其の日も此の間の風よりもずつと強い風が吹いてゐた。それに少しく雨が加はつてゐるので傘を幌にして表の道を歩いてゐた。すると後の後で自轉車の鈴の音がしたので振返つた時傘に風が下から吹上る様にもつたので小さい僕は体がひよろりとした拍子に少し空中に浮上つて飛ばされた

前には柏原、東黒田の電燈がぼつん／＼と光つてゐる。後には若狭灣と覺しき海が黒く見える。夜の景色は實にいゝ。雲が金色に輝いて來たと、思ふと、かあつと御光がさして、間もなく大陽は上つてきた。その尊嚴さは何人も脱帽して頭を下げざるを得ない。今日は大變よく拜めた。聞けばこんな日は珍しいさうだ。よき日に登山した事を喜ぶ。しばし綺麗な大陽に見入る。

次に御花晶を見に行く赤、白、緑とり／＼の花が咲き亂れてゐる。其の美しさはさても筆舌に盡し難い。ここからか、鶯がホーホケキヨと可愛らしい聲でないた、樂園に遊ぶ感じがする、脚下に廣がる景色は雄大といはふか、豪壯といはふか、實に山へ行かねば見られぬ壯觀である。朝の清々しい空気を吸つて下山する。歸りはとても早い。

十一時十分元氣よく歸着した。

## 朝

一年 樋口 芳朗

勢よくとび起きた。今は五時頃だらう。外を見れば二、三日ぶりの快晴だ、顔を洗つて新鮮なトマトを食する氣持は又格別である。

姉と幹とを送る爲、叔母と滋と共に家を出て露のしつとり

のだ。八米位飛ばされた。落ちる時石につまづいてぬかるみに倒れて、着物をごろ／＼にして叱られたことを覚えてゐる。今廣い所で少しでも飛ばたらそんなに愉快だらうと思ふ。

## 濱の朝

一年 大 照 完

夏休みになつて毎朝濱へ行くこゝにしました。五時前に起き、揚子を持つて濱へ行く。濱の手前の晶には隣のおばさんが西瓜、芋にごま等に水をやつてゐられる。まだ東の山には、お月さんが上つてゐないが、百姓さんは朝が早い。もう北にも南にも小路々々に桶に一ぱい水を入れて、小走りの様なかつこうで、水持をしてゐられる。

昨日の塵も波にさらはれてしまつて、岸は小さい波がちやばん／＼打つてゐる。膝まで入つて、澄切つた水で顔を洗ふ冷い。大へん氣持がよい。小鮎の群が小さい波を作つて、ちやび／＼と小さい音をたて、進んで行く。水平線の所が白く線を引いた様になつてゐる。此の爲か多景島が浮いてゐる様に見える。

砂の上の上つて、顔を拭いてゐると五十位のおぢさんが、手ぬぐひを肩にかけて北南を見渡しながら來られる。此のおぢさんは前から、濱行きをやつてゐるらしい。此の時間に毎

朝來られる。顔も洗つてしまつて、カ一ぱい体操だ。ちつとしてゐると寒い。ラヂオ体操第二も終つて、ふと見ると僕のかげが電信棒の様に長く水面に寫つてゐる。お日さんが上つて来たのだ。僕はもう歸らうと、日光を一面に受けた湖に向つて、大きく深呼吸した。川原の方で砂取船のボンのく音か聞えて来る。砂取を終つて西江州へ歸るのだらう。

## 秋の雨の夜

一年 西島寅次

すゞをふるはせるような虫の音が、しとくと降る雨の中からきこえてくる。

傘の雨だれが急にはげしくなつてきた、三町の電燈の光がぼやけてふちが虹のようになつて見える。虫も急に泣きやむ十一月の朝のやうなさむさか身にしみてくる。店の戸をあちらでも、こちらでもがら／＼としめる音がして町の人々が急にいそぎ出す、自動車もものすごい光を放ちしぶきを上げて走つて行く。

なつかしい小學校の先生の家をふりむきつゝ宮町を廻つて八幡さんに向ふ、雨が一てき一てきとやんできて月光にかゞやく雲さへ見えてきた。ここかで十時を打つと、思ひ出したやうに虫が、きい／＼と泣出してきた。雲の間から出てきた

ず駆出した。

やつと郵便局へ著いた。パネ仕掛のドアを『うん』と押しあけて中へ這入つた。中は非常に明るく。電信機はあはたゞしい聲を立てて居る。僕の視線は矢の様に時計へ注がれた。七時四十五分だ。まだ八時迄には十五分もある。電報を打ち頼信紙を貰つて、郵便局を出た。

歸りにも寂しいので、大股にさつさと歩いて、東小學校の横を通り過ぎて、大橋家の庭の横へさしかゝつた頃、庭のついで向ふの堀の邊から『ブー、／＼、／＼』といふ音の低い、底力のある様な無氣味な音が聞えて来た。其の瞬間、體中の毛がよだち、心臓はぎつき／＼とひどく鼓動を起し始めた。と思ふ間もなく兩側に立ち並んでゐた樹々が急に近寄つて来て終には我が行く手をさへぎつて、立ちふさがつた様に思はれた。又も後の方で、さつきの音がしてゐるが、振り返りもせず、一目散に駆け出した。

走りに走つて、やつこのことで家へ著いた『ガラガラツ』と玄關の戸をあはたゞしく開いて、中へ駆け込んが。家の中へ飛び込んで、やれ／＼と胸をなで下したもののそれでもまだ胸の轟は止まなかつた。

其の夜程寂しい思ひをした事は、今まではになかつた。あとから考へると食用蛙の鳴く聲であつたらしい。

日の光に、今やんだばかりの雨にぬらされた、屋根瓦がするさく及物のやうに輝いて今ぞとばかりに虫達が一せいに、なき出し軒にかはれてゐた。ガチャ／＼も得意のやかましい聲で啼く。

自轉車が時々、しゆう／＼と僕をこして行く。起きてゐる家は五六軒ではかは寝たらしく戸がしまつてゐる。僕はその時こんなことを考へた。秋につきものは虫冬につきものは雪春につきものは花夏につきものはなんだらう登て山か、水泳だらうか、いや『蚊』だ。秋近くなつて『蚊』もぬない勉強に適した時がきた。今日から勉強をしようと思つ足をやめた時、鳥居が眼の前になつてゐた、鳥居をすぎて本殿に向ふと、あたりの虫がぱたり／＼となきやみ又なく、秋の虫はだいですきだ。

## 或夜の使ひ

一年 松田信

大變むし暑い或晩の事だつた。時間外にならぬ間に、電報を打つて来る様にと言ひつかつて、七時半を過ぎた頃家を出た。家のすぐ前は寺で、晝間でさへ人通りが少く、只寺の境内の樹々で啼く蟬の聲が聞える許だのに、今は其の聲さへ絶えて、寂しさはたとへ様もない。餘りのさびしさに、我知ら

## 昆虫採集日

一年 江龍貞藏

八月十三日僕達三人は昆虫採集の目的で山登りした。天寧寺山からすつと原の方へ行くのが今日のコースである。十時元氣に家を出發いろ／＼話しながら急いで歩く、早や眞夏の太陽は高く強く照らしてゐるさてもあつて、義郎君はリュクサツク肩に重さうにして居られる。

弘君と僕は途中も昆虫採集のあみをつかふ事をやめない。廣い野原をあつちの木へ行つたり、こつちの木へ行つたり、とてもいそがしい。

十一時半ごろ天寧寺山へ着く。それからいよ／＼虫採りである。澤山の虫がすい／＼飛んでゐる。蟬も今が我れ天下と、やかましく合唱してゐる。義郎君のさしづの下に、僕と弘君はかけづり廻つた。

蟬やとんばが面白い程つかめる。やがて頂上につく。義郎君の重たいリュクサツクがおろされる。おにぎりすし卵パイ、ンアツプルなごいろ／＼の物がでる。三人ははるか下にある彦根の町を見下しつゝ腹一ぱいつめこむ。愉快とても愉快食事しながらも何度か毒びんの中のをぞきこむ。

約四十分程そこで休けいしてそれから下山する。今度は原



の方へ出るのである。途中廣い野原で美しい蝶々をとる。それから池のはたで、とても細いとんぼがつかめたいらしい。三人は元氣だ。走るやうにして虫をこるが、あついで、とてもあついで、日中の眞盛りだから、汗は瀧の様に流れる、でもかまはづかけづり廻る。原の終り邊まで行つて又三人は後もさりする。今度は大分くたびれたから、虫採りをせず、口笛吹いたり、話しながら歩く、やがて又天寧寺山へもさびつく、そこで一休みしてよく／＼歸途、大分元氣ももり返した。又々昆虫を追ひ／＼して下山する。毒びんの中には大分たくさんのお虫がうごめいてゐる。

うれしい。  
長い夏の日も早や夕やけ、雲がうつくしくえがかれてゐる。三人は元氣よくたそがれの野を、一日のつかれも忘れて元氣に歩く。

## 水 泳

一年 野村 實

我が大日本帝國は、東部南部を太平洋、北部はオホーツク海に、西部は日本海や東支那海にとりまかれた島國である。その海國である日本帝國の國民僕等は、海や湖を恐れてはならない。いや海や湖を愛し、親しまなくてはならぬ。

海や湖を親しむの一番よい方法は水泳だらう。僕は水泳が大好きだ。小學の時遠泳で五軒泳いだ。夏期の休中も、友達と毎日のやうに水泳に出かけた。水泳は身體を健康にするにはよい運動だ。だが水泳は大變危険な運動であるともいへる。毎年水泳で命を落した人が多大にある。死んだ人の大分は水泳に自分はよくなれてゐるから、おぼれるやうなことはないと思つて、單身で深い所へいくからなのだらう。僕等はそんな危険な所へ行つてはならない。

日本は水泳の國だ。水泳日本の譽は高く世界に鳴りひびいてゐる。此の間も世界水泳の王座をねらふ日本とアメリカの水泳大會が開かれた時、日本は堂々アメリカ水泳選手を退けて、水泳日本の譽、世界水泳の王座を守り得られたのである。日本の水泳選手は世界一だ。だが日本水泳選手が世界一でも、その國民が水泳を知らなくては世界一の水泳國とは言へないかもしれない。海國日本の國民ならばみんな人々でも水泳が出来るやうにならなくてはならないだらう。

此の間か縁丸が瀬戸内海で遭難した時、乗客に水泳の心得と落着があつたならば、さうたくさんの人々が命をうしなはなかつたかもしれない。天の橋立ての遭難も同様のことだ。日本は海國なのだ。僕等はもつと／＼水泳を練習して身體を健全にし、天皇陛下の爲、日本帝國の爲につくさなくてはならぬ。

## 横須賀港見學記

一年 小堀 滋 彦

僕は幼い時から軍艦が大好きであつた。大きくなるにつれて本當の軍艦がみたくてたまらなくなつた。『今年の夏は是非上京してこい』と東京のお祖父さんからのお手紙に僕も飛び立つ思ひで上京した。そして早速軍艦の話をする、それでは横須賀の軍港を見學に連れていつてあげると云はれた。そして色々交渉してくださった結果、八月六日に見學にゆく事になつた。八月六日朝早く叔父と一緒に家を出て横須賀行きの電車にのり、一時間余りにて横須賀驛に着いた。此所はさすが要塞地帯だけあつて附近は屏風岩を立てまはしたやうで其の下を通つて直ぐに行き、左に折れて白濱に着く。此所に三笠記念艦あり、之れぞ日本海大戦の時世界に其の名を博した旗艦三笠なのである。その後ワシントン會議の結果廢艦となつたから此の輝かしい歴史を持つ軍艦を永久に保存するため機關部を取のぞいて白濱の岸壁に置かれることになつたのださうである。水兵の案内で艦内に入る。

艦内には數百の彈痕があつてそぞろに、日本海大戦の當時の東郷元帥をはじめ、將士の奮戦の跡がしのばれる。此所を出ると十八間道路があり其の左手に横須賀鎮守府を見て軍港

にゆく、門前には歩哨が立つてゐる。敬禮をし門内の將校詰所にて比叡見學の許可を経て、港に出る。

丁度今海軍の演習を終へて休息してゐる軍艦多數あり、其の威武堂々とした様はもうてい筆舌につくされさうもない。僕は此の國に生れた頼もしさ、嬉しさに涙ぐんだ。これは天皇陛下の御稜威、下萬民の一致協力のためものを感じたいよ／＼ランチにつて軍艦比叡にむかふとして艦内を水兵さんに案内してもらつて、三十六糎の大砲を見學した。この大砲は前後に四門づつそなはつてゐるのである。此の大砲が一度ひらいたなら、いかなる大海でも裂けるばかりださうである。それより一階におりて艦長室、副長室を見學した。此の軍艦はかつて滿洲國皇帝陛下の御成りの時の御召艦で、其の皇帝の御居室も拜觀しました。又來る海軍大演習の時には聖上陛下の御召艦になるのださうである。第二階に下りると此所は十五糎砲十二糎砲の打ち出すところがあり、又拳銃や鐵砲の倉庫があり、又水兵の娛樂室や寢室もあつて水兵さんは皆ラッパの合圖で仕事をするのである。つり床の中で一日のつかれをやすめるのである。そして起床ラッパがなると一齊につり床をばづして一日規律たゞしく各々の任務につくのださうである。かうしてこんな暑い日でも、こんな寒い日でも一時のたゆみもなく、鍛練し一朝有事の場合皇國の守護、國威の發揚をなすのである、と案内の水兵さんは語られた。

又すばらしい大きな炊事場があつた。小學校の讀本でならつた軍艦生活の朝といま實際の見聞とを聯想してはなんともいふことの出来無い、面白味を感じる事が出来た。水兵さんは『これで説明を終わります』といはれた僕等は親切に説明して下さつたのを厚くお禮をいつて又もとのランチに乗つて港に引きかへし歸途についた。

### 名古屋城を観る

一年 金子 治彦

八月十八日午前十時頃名古屋城を參觀に行く。正門を通ると、きれいに玉砂利を敷いた道が真直に表二之門の前までつゞいてゐる。門を入ると又門がある。これが表一之門である。それをくゞると、そこに名古屋城がまだ離宮であつた頃、天皇、皇后、皇太子殿下が御駐泊になつた御殿がある。拜觀せず天守閣の方に行く。途中に加藤清正が城を建築する時城へ運ぶ大石の上に乗つて音頭を取つたといふ清正石を見て天守閣に向ふ。空は青く澄み渡つたなかに天守閣が屹然と聳え、金の鯨が日に輝く様は何とも言へぬ壯麗な氣がする。小天守閣に入れば『此處は御金藏の跡である』と立札に記してあつた。其處を出て天守閣に入る。天守閣は五層あつて加藤清正が建築したもので中に入ると、天井には太い丸太の梁が

庫等を參觀して、名古屋城は立派で壯觀だ、加藤清正は城造りの名人だ、等の事を考へながら感慨多いこの名城を辭した

### 石山と三井寺

一年 島 津 清

先刻の猛雨もあと無くやんで、今は明るい雨あがりの田園の中を汽車は涼しい初秋の風にふかれながら南へ／＼と走つてゐる。

田園の稻、遠くの森や林はみな青々しい力の満ちた體をして、この雨あがりの涼しい風になひいてゐる。だん／＼と雲は登り、雲間から太陽は紺青の空と共に顔を出した。と、琵琶湖は黄金の湖の如くきらめき輝く。その様は、實に壯快だやがて先刻の雲も姿を消し、今は紺青の空に化した。その時、汽車は石山驛についた、ここより電車にて石山下まで来た。瀬田川は優美で、いき／＼とした兩岸の樹木と合して初秋らしい姿を現はしてゐた。

仁王門をくゞると、參道の兩側には何百年経つたともわかない古い樹木が立ちこめてゐる。この青葉のトンネルの中を通り過ぎて、石段を登りつめると、奇岩怪石があたり不起伏して、眞に石山と言ふ名にふさはしい。ここは西國三十三ヶ所の札所として世に知られてゐる。本堂は千百余年の昔、

横たはつてゐる。少し上の方の壁に窓や銃眼があいてゐて、其處から日が薄くぼうつと入つて来る。階段を昇る。其處には柵が嵌めてあつて、人が入れないやうにしてゐる。階段を昇り昇りして、へ／＼／＼になつて天守閣の一番上まで昇つた。此處は城主の居間で側の臺の上には、この城を中心にして、東西南北の方向には何が見える、又其の中間の北西、南東等には何處が望める等の事を記した大きな圖盤があつた。昔城主は此處で老臣等と策戦計畫を練つたのであらう。窓から市街を眺めると、百貨店、銀行、商店、住宅等で一ぱいである。そして其れがすうつと、先の先まで續いて霞に包まれて見えなくなつてゐる。又反對の方を望むとグラウンドや芝生が、すうつと續いてゐる。多分公園であらう。それから少し休憩して階段を降りる。皆降りてしまつた處に、黄金水といふのがある。飲料水で加藤清正が苦心して掘つたものであるが水が中々澄まず、黄金を沈めてやつと澄んだので黄金水と名付けたさうである。天守閣を出てしばらく行くに、人の名前の彫刻がしてある大きな石に出逢つた。これは『加藤清正の家來で、築城に功のあつた人の名を刻み付けたものだ』と説明の立札に書いてあつた。北の門を出て空濠を覗く、其處に覆がしてあつて鹿が二三匹寝轉んでゐた。見た瞬間ふと奈良の鹿を思ひ出した。あの人なつこい鹿を思ふ時、この鹿も、そばに寄つて来るやうな氣がした。それから賢所御跡、乃木倉

僧良辨がここに如意輪觀音を安置し、その後、聖武天皇がここに寺を建られたのだ、と傳へられてゐる。本堂の東側にある源氏の間は、紫式部が彼の有名な源氏物語を此處で著したのだと傳へられてゐる。

やがて板倉造りの經文堂や、國寶の多寶塔を過ぎて月見亭の傍に出る。月見亭よりの眺めは最も良く、はるか北方を望むと、琵琶湖の西岸に比良の連峰は高く雲間に連らなり、青々とした姿を靈湖に寫すかの様にその側に突立つてゐる。瀬田川が琵琶湖と化する處には、唐橋、鐵橋の三條の橋梁がゆるやかな瀬田の清流に長く横たはる眺めは、全く繪の様な景色である。又秋の夜、對岸の山に登る月、それが瀬田川の清流に姿を映し、さゞ波に月影がくだけ、金波銀波のさざ波をたゞよはせる。秋の月夜の美麗なる光景が、その時の僕の眼に寫つた。

汽船に乗りて唐橋の下を通つた。今日は天津の琵琶湖祭、唐橋は今日は美しく化粧してゐた。

船に乗つて眺める景色は一段の趣がある。比良の連峰も今は白雪をぬぎ、空は日本晴れの好き日と化した。唐橋はだん／＼離れ、濱大津はだん／＼と近づく。濱大津についた琵琶湖遊覽、八景めぐり等の、京阪丸や、みどり丸を始め流線型辨天丸等十數隻の汽船を見る弟は非常に喜んでゐた。汽船は三井寺下へ着いた。ここで船から下り、二人は三井

寺目指して進んだ。少時して、硫水に添うて歩いた……。とうとう三井寺の石段を登り始めた、汗をふき／＼登る。とう／＼本堂の前へ出た。一番に本堂を拜した。ここも石山寺と同じく西國三十三ヶ所の札所だ。

展望臺に立つと、眼前には大津市の全景がひらける。遊覧縣廳の所在地、縣下第一の都會だけあつて洋館も多く、あたりの空氣すら少し都會らしく感ぜられた。鏡の如き湖上に浮ぶ白帆の影も長閑である。南郷丸ははや姿を消した、島めぐりのみぎり丸さへ豆の如く小さく、黒煙を一條の黒糸の如くたなびかせてゐた。柳ヶ崎の琵琶湖ホテルも靈湖に影を映してゐた。先刻から吹きつける涼しい風は、汗ばんだ額をなでて通り過ぎる、その涼しい風にわかれながら、心新になつて秋の月夜が見たくなつて來た。

東の空に浮ぶ満月が、暗の靈湖に金波銀波のさざ波を起させ、空は青く澄み渡り、街は黄金に輝くその光景を!! やがて傍の茶店で辨慶の方餅を食べ、腹をこしらへて、辨慶の様な元氣を出して又く／＼歩み出した、三井寺を後に濱大津へと!!

濱大津は琵琶湖祭の廣告で一ぱい。だ電車は皆美しく花電車に化粧してゐた。

ここより電車で京都へと向つた。電車は走る、初秋の京津國道を――。

## 夏の旅

一年 吉居恒雄

七尾を出帆した船はグン／＼スピードを増した。エンヂンの音はおどる心臓である。汽船は今しも七尾灣の波を蹴つて一路宇津出縁の港へ!

私は甲板の積荷の上に腰かけて移る景色を眺めてゐる。この景は確かに絶景である。遙の海上には日本アルプスの立山や劍岳等が白い衣を着て雄々しげに聳えてゐるのも山國の僕には懐しい。島上に金の十字架がたつてゐる。

教會、此所には修道尼達が世を避けてゐる様だ。大小の島を巡つて波靜かな七尾灣を出た。漁師の小舟にあつた。彼等は赤銅色の腕で櫂を握つて大きなうねりの中を巧に小舟を操つて行く。海國男子の勇ましき事よ。神よ伏して願はくば彼等を護り給へ。

一人の船員が船尾で釣をしてゐた。釣道具たるや真に簡單で釣糸に魚形の木片をしぼりつけたものであつたが、はげや鯛がよく釣れた。かん／＼と照りつける太陽を浴び潮風に吹かれながら釣をするのも感興があるてはありませんか。

× 櫻花と共に春は去つて新緑と共に夏が來た。明けわたる空

は紅く燃える様だ。なびく横雲の間からは鮮やかな空がのぞいてゐる。

『今日もお天気だ』狼煙まで遠乗だ車にスピードをかければ涼風頭にそよいで心も体も軽くなる。日本海の狂濤が飛上つてゐる岩上を、／＼びく／＼とする間に飛越えて行くかと思へば、海拔數百米の坂道を登りつめるに展開された風景、雄大と言はうか、豪壯と言はうか、一方は直立した岩壁をのぞけば遙かの下には狂濤の響、一方はどこまで續くか知れない山脈が重なり合つてゐる。狼煙は能登半島の尖端にある一小部落である。此所は燈臺があるので有名である。我々も親切そうな村人から場所を教はつて伯父二人で燈臺守の家を訪ねた。

燈臺と言へばすぐ英國の有名な燈臺守の娘『ダーリング』の居たやうな寂しい波風の他は友をさすべきものがない孤島を想像されませう。併し此所は寂しい所ではありません。花園の朝顔を赤よ白よ紫よと指さし行けば美しいマンドリンの音が風に流れて來ました。技師の案内で螺旋上の階段を昇りつめると、大きなレンズのある所に出ました。

『燈臺は何時頃日本に建造されましたか』

『日本に初めて西洋式の燈臺の出來たのはあの有名な『ペルリ』の來た時に徳川幕府が和蘭の技師に誂へて相模の觀音崎外七ヶ所に設置したのが初めてです。この燈臺は明治の中

頃出來たものです』

『材料は日本では出來ないのでせうか』『レンズだけがよいのは出來ないさうです』『種類は』向うに一隻の汽船が見えて來た。ウラジボストツクへ行くのだろう。

『燈臺は光の強さ、光の達する距離の大小によつて一等から六等迄區別されてゐます。此所のは二等燈臺です。電氣を用ひずに石油を用ひてゐます』成程燈臺前に二つの大きなタシクがありました。

それから技師は昔の燈臺守の話をしてくれました。

我等は厚く謝して山を下りました。ザア／＼と濱邊に波は寄せては返し寄せては返してゐる。見れば老漁師が日なたぼつこをしながら漁具の手入をしてゐた。豊漁の知らせをまちながら。

さうなら。燈臺よ。平和な漁村よ。





詩

月光

五年 田中正義

月光が松の新芽をすいて  
かすかな風にゆれる。  
針影が  
白いシャツに斜状に見える。

大理石の置時計が——。  
靴をはいた中學生が  
彦根の街道を  
勇んで歩く足音の様に  
清澄な室内の空氣を  
ふるはして時をきざむ  
あゝなんと静かなこと  
胸の鼓動がはつきりと聞える  
健康な響が

規則正しく傳はつて來る  
手を動かすのさへおそろしい様な  
静けさだ。

光と蔭のシンフォニー

ほのかにうごく  
エメラルドの水面に  
何ミ云ふ柔らかな  
光澤ぞ——スワン

スワンは迂る  
ヨットの様に  
軽くおとなしく  
輝やく水の表を

春の日は池一つばいにあたゝかく  
光の蔭のシンフォニー。

窓より

外はきれいな  
月夜です

たゞぼんやりと窓により  
口笛吹いて  
空を見た。

外はきれいな  
月夜です  
蟲も啼きます  
長い夜を

外はきれいな  
月夜です  
池のさざなみ  
音もなく  
空の銀河をうつしてゐる

緑丸を憶ふ

五年 保滌義三

初夏の日ざしのさへぎらる  
梅雨も半ばの涙雨  
そば降る瀬戸の浪頭  
白き姿をそのまゝに

屋島わたりの緑丸  
浪にうつりて滑り行く

國立の公園瀬戸内を  
灯影冷たき高松に  
さらばと別れ指して行く  
霧立ち籠むる小豆島  
汽笛悲しく長く引く

再度三度とごまかりて  
又遅々として進み行く  
霧と闇との緑丸  
兵庫港の死の門出  
忽ち迫る貨物船  
またゝくひまに吞まれたり

想ひ起せば去年の春  
旅にはしやく吾等をば  
泉都九州別府より  
安藝來島を乗り切りて  
遙かに手取り慰めし  
清き姿のみさり丸

想ふもかなし線丸

朝

五年 光友正

朝を、元氣な足ごりで踏まへて見る。  
私は生きてゐる  
朝を、愉快な氣分で見返してみる  
私は若い。  
太陽が笑つてゐる  
小鳥が囀つてゐる  
森羅萬象が新しく清く活き活きてゐる  
私の人生の朝

ガラスと窓をあけつゝ  
カーテンに巻かれて空を讀ふ  
長い夜を鳴くキリギリス

落日

五年 寺村義夫

沈みゆく 日輪  
紅の雲の中をなほ紅に光る玉  
芹川の水は紅く光る  
田の豊かな稲は金にゆらぐ  
比良へ落ちる日輪、大日輪

窓より

五年 大橋文吉

カチヤンとベンの音がする  
インク瓶へ突入したのです  
繰返しペンはノートの上を走る  
あゝ秋の虫が……  
外はきれいな月夜です。

オ、世界の總てをあかく包む紅の落日  
自然は今除るに合掌をさしげる  
恵みの感謝

沈みゆく 日輪  
紅の雲の中の 紅の光

九月の胸

五年 伊吹義雄

夕、痛々しき傷心にうづき。  
幸福の幻影をひた追ひつゝ。  
俺はひとときの荒野に彷徨ひ出る。

朝、輝かしい黎明の光を浴びて  
俺は 初春の如き清新さに匂ふんだ。

冬の月

四年 湯本信良

俺は泣いてゐる。  
嘲弄の的となりて。  
併し——。  
俺の心は燃えて來た。  
ほごばしる火は俺の聲だ。  
俺の口は火を吐く。

俺の眼は鋭い刃だ。  
俺の視力は焼火箸より鋭い。  
従つて、  
俺の思想は森羅萬象を溶かす。

秋だ 九月だ。  
新しき明日がまつてゐる

一  
木枯寒く夜のふけば  
冬ぞ寂しさまさりける  
落ちる枯葉のかさ／＼と

二

家路を照らす冬の月  
外ゆく人の影絶えて  
誰れが吹くのか笛の音の  
凍るみ空にながれゆく

三

霜置く里の月白し

黎明

四年 佐藤達男

黎明——。

東の空がほの白く明るんで鐘が鳴る。

静かな田舎の朝は、

さよ／＼と稲穂に波打たせて

吾等に朝である事を告げて行く。

見よ！、

平和と希望に充ち／＼て昇りくる太陽を。

太陽の下の山を野をそして人を——。

星

四年 藤谷賢雄

星は瞬く。

野の果の端山の上に

無言のさゝやきを續ける。

愛と平和と悠久と神秘と

青い沈黙の瞳に、潤む涙と暎と、

星はまた／＼く。  
永遠のしどま——星一つ落ちて命ひみつ消ゆるといふ。  
だが、夜空は美しい。  
美しい銀砂子の微笑はいつまでもつよく

闇路

三年 北村忠夫

月は落ちました

月は落ちました。

今私は暗い土手を歩いて居ます

淡い星明りを頼りに歩いて居ます

そして私は唯一人です

一步／＼町より離れます、振り返れば町は劫火の如く

紅葉に燃えて居ます。

私は町に嘲笑を送りました。

現實の網よりのがれようと急ぎました

私の頭を幻想が通りました

何だか泣きたい

闇路を獨り歩く孤獨の寂しさ

心は東京の姉の許に走ります。

琵琶湖

三年 山川繁

一、春は錦の近江路や、青嵐薫る栗津野は

彼の兼平の眠りゐる、その義仲寺を君知るや

志賀の都は山櫻

二、夏は翠の竹生島、七本槍の賤ヶ嶽

彼の若武者の高き香を

比良よ伊吹とすなごりの舟はひかれり湖の上

三、秋は紅葉の永源寺さては月よき石山の

源氏の窓に影さして、匂ひ出でたる物語

堅田は雁のたよりかな

四、冬はスキーか雪の山名ある牧野はみえわかす

彼の聖人の故郷の風吹く宵の西近江

影も動かぬ瀬田の橋

海邊に立ちて

三年 窓岡秀道

東の海は白みたり

高きに登り眺むれば

青海原の其の中に

安らかに行く白帆影

青海原の其の中に

波は休まず撫ますに

相打ちくだけで狂へぎも

安らかに行く白帆影

やがて消えゆく白帆影

高きに登りもとむれさ

大海原の其の中に

残るは波は音ばかり

夏

三年 鹿谷武雄

樹々に鳴く蟬讃えよ夏を

樂しき夏のみぎりの森に

歌へ／＼緑の讚美

水にとぶとり千鳥よかもめ

樂しき夏のみぎりの海に

歌へ／＼水の讚美

雨のこゝろ

三年 青木外志夫

雨はしと〜銀の絲  
天から下した絹のやう  
あたりは霧に包まれて  
あらゆるものは眠ること  
隣で鶏の鳴くこゝろ

雨はしと〜銀の絲  
天まで届く針のやう  
ごこか狐の嫁入さうな  
山の彼方に虹の橋  
天女の渡る橋さうな

雨はしと〜銀の絲  
天に渡した橋のやう  
入相鐘もたそがれて  
夜のとばりの下りる頃  
さびしく河鹿の鳴くこゝろ

雨のガス燈

三年 建部恭三

雨の音におびえた小鳥の影だ  
淡いガス燈に舗道のレンガが濡れてゐる  
淡く照らし出されたで〜虫がまぎのさんに  
硬直して煙つた細い雨の音だ

ガス燈が大きく瞬いて  
雨が一しきり横なぐりに吹きつけて来る  
警笛の音もかすかに赤いテイルライトが  
煙つた雨の中に消えて行く

夜

三年 大日方正明

一、淋しい〜夜だつた  
虫が鳴いてる夜だつた  
母が戀しと泣く犬の  
悲しい聲に引かされて

夏の校庭

夏の日の  
金亀の庭に  
打振ふバット  
充滿せる赤鬼魂

みなぎる精氣は  
グラウンドを行く球  
若き選手の兩肩にかゝる  
名譽と責任の赤鬼魂

琵琶湖のあなた

三年 北川 浩

初めて登つた山の上  
高い〜山の上  
山の上から望むれば  
山越え田越えて青い湖  
青い湖には銀の船  
土色の舟金の舟

初 秋

三年 八代清志

澄んだ風が  
枯れかけた柳をゆすつてゐる  
城頭のとびの影が  
愉快さうにグラウンドを這る  
道を通りゆく日傘に  
秋の日が輝いて  
まぶしく光りながら  
小さくなつてゆく。

船の行手は西江州  
青松小松の舞子とや

すかし見すれぎ白砂は見えずに  
青い青い山ばかり

日

暮

二年 満島俊次

明日も又天氣だ。西の空が眞紅に染つてゐる  
夕焼だ。夕日が沈むのだ  
そして亦今日が暮れるのだ  
「光陰は矢の如し」古人も言つた  
朝が夕日になり 今日が明日になる  
私はしづかに  
城山の五時の鐘の響をきいてゐる

夜

二年 中川義朗

あたりは森閑としてゐる  
何の物音も聞えない

美しく夕日に照り映えてゐる  
刈り取られた田の面は夕闇につままれてゆく  
私もまた夕闇に包まれて急ぐ  
急げ、故郷は近い  
私はベタルを軽く、そして又強くふむ。

メタル

二年 谷口勉

私が歩く度に、私の腰で二つのメタルが音を立てる  
一つは去年のマラソンで、一つは今年のマラソンで戴いたの  
だ  
二つのメタルの立てる音は、自慢話をしてゐるのだと私は思  
ふ  
あのマラソンの日のつらさはみんなこのメタルの音に含んで  
ゐる  
メタルの表に描かれた鬼の顔には  
堅忍不拔の功が語られてゐる  
すれあつて音を立てる二匹の鬼……  
この鬼の魂が  
かうして僕を健康の世界へと連れてゆく

たゞ時計の音が耳に入る  
静かだ 寂しい 恐ろしい  
その考へが胸を覆ふ  
何かおそつて来る様だ

窓を明けた  
ひやりと冷たい風が顔にあたる  
空には青白い月が光つてゐる  
一面に霜が降りて居る  
木も 屋根も 大地も  
霜と月とが照り映えてゐる  
私は立つてゐた。いつまでも いつまでも。

秋のくれ

二年 藤川俊彦

日が西の山へ隠れる頃  
私はでこぼこした田圃道を  
自轉車をぎん／＼させながら  
故郷へと驅けて込んでゐた  
眞赤になつた西の空の美しさ  
枯枝に寂しく残された柿が

色

二年 岡見正良

赤……  
人の血のやうな色  
人の血のこもつた真心の色 私の好きな色  
青……  
海のやうな色  
インキのやうな綺麗な色 私の好きな色  
白……  
清い色  
きもちのよい色 私の好きな色

喧

嘩

二年 羽淵輝年

けんかして  
そのあとのなんぞ寂しき  
本をたゞいて歎くのです。この心のやりばのなさ。  
傷つけて……  
みんなにか苦しきこの心



早くなほるやうにご祈るのです  
ほつべたを  
たいた時の心持  
ふこいやな氣になりました、にらまれて  
さびしい氣持になりました  
あの険しい目付き  
別れてからも  
さびしい心 苦しい心  
まだあの日が追いかけてくるやうなのです

### 朝の道

二年 勝文夫

冬の朝を私は行く  
まだ静かな路上を  
朝日は照す  
私は健康で歩いて行く  
朝の清き空氣は  
私の胸一杯にふくれ上る  
私は健康で元氣に満ちて歩いて行く  
寒風に負けずに歩いて行く

### 飛行機

二年 藤關信太郎

青空の彼方より  
飛行機三臺  
爆音高く日の丸の印鮮やかに  
飛ぶよ 飛ぶよ  
空は寒かろ おゝこの寒さ  
皆單葉だ 戦闘機だ  
ぐんぐん空をすべつてゆく。  
そして河原の森にかくれた

### 朝顔

二年 湯本俊彦

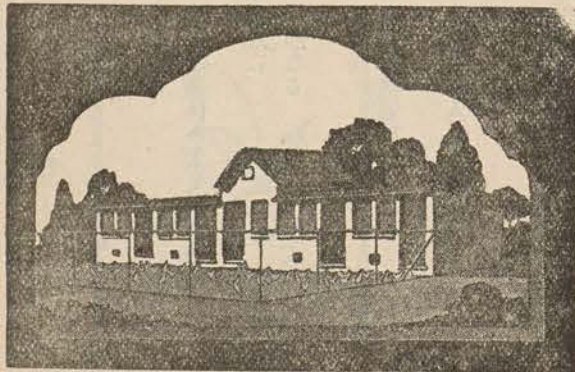
咲きおくれの朝顔  
さびしさうに悲しさうに  
上を見上げる小さな花  
静かに佗しく咲いてゐる花  
菊の花のほこらしげに咲くこの秋を  
羨ましげに、怨めしげに。

天にうつたへるかの様に咲いてゐる  
咲きおくれの朝顔の花一輪

### 伊吹山

二年 堀田肇

私は伊吹山を愛する  
朝に仰ぎ夕に仰ぐ  
私が伊吹を眺める時  
私の心はすらつと水のやうに流れる。そしてまた固まる  
神さびた森のお宮へ詣り  
手をぼんと打つた一瞬のやうに——  
おゝ 私の伊吹山の山の雄大さ、山肌の美しさ  
生れて十幾年伊吹の山裾に住むうれしさ





自由律短歌

湖岸

五年 大橋 文吉

古びた浅橋の太い木影等が  
長く、短かく波の上に動いてゐる。  
美しいレコードのリズムが  
ちらほら聞える夢の様な濱邊だ：：静かだ  
ザクムと  
小砂の上に一直線となつて描ける僕の下駄の跡  
聲立て、驚き移る水鳥の  
翅も、脚も、紅色に濡れてゐる。  
防波堤に湖の草が緑にゆれて  
たのしげに  
夏を迎へてゐる

汚れ切つた船着場に  
金鱗は静かに踊り  
太陽は比良の連峯へ徐々に吸はれる

青空

五年 林 義夫

青空に消えゆく煙  
石に腰掛けて眺むる夏休み果てたその日  
停車場路の秋の辻に  
朝の虫の音すするなる  
懐しの電車の窓より  
吸ひたくなりぬ寒き空気を  
朝風が電車の中に吹き入れし虫一つ  
眼鏡にあたりて下に落つ  
其處ら此處らに虫の鳴く  
秋の寒き夜にする物語ひ  
風去りし後の柿の木を見て口笛かすかに吹きてみぬ  
月明かき夜に

今日ひよいと山が鬱しくて山に來ぬ  
友住む懐しの村を見たさに

秋だと云ふに——  
ツクツクボウシの暑い鳴聲が射撃場のクルミの木蔭でする  
ストロンチウムとバリウムの緑と赤の花火が  
交々に飛ぶ愛知川の長い橋

風

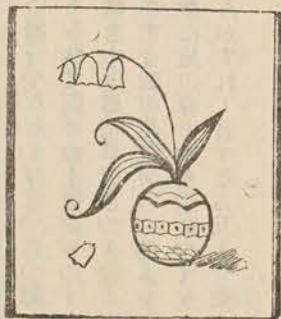
三年 建部 恭三

風速計が五〇米を突破した  
測候所の屋根にかちりついた所員の顔  
振り上げたハンマの下に  
風速計が狂つた様に廻つてゐる  
轟然と倒壊した校舎の其所此所に  
生へのうめきが聞えて來る  
あ、松の木が、折れたさけた倒れた  
自然の猛威嵐だ嵐だ嵐だ

地に接せんばかりに振られる木

眞二つにさかれた大木にばら／＼と雨が降る

横なぐりの雨に頬を赤くした消防夫が  
血眼になつて走りまはつてゐる





和歌

五年 國領 太刀雄

濱に來て一人歩めば波際の砂に残れる足跡のきえゆく  
涼風のそよぐ心よ窓を開きて天の河仰ぐ夜のたまゆら  
月の夜にギターの調べ清らけく澄みたり四方の木にふるはし  
て

大橋 文吉

落葉焚く眞白き煙たちゐつゝ友と愉快に秋を語らふ  
となり家のさみしき暮し思ひつゝ啄木歌集一人讀みけり  
雙鏢と働き續くる老人を見たり病院の窓にもたれて  
ガソリンの煙残して走り來る自動車速しお嬢端かな  
ポードレスに負て互に泣き伏しぬかなしき顔の水にうつれり  
カーテンにほのかに映る月の影目覺めてききし虫のなくこゑ

光友 正

靜かなる小川よ浮ぶ櫻花春にうかれて歌歌ふ頃

朗らかな春伊吹山歩む身の若葉の匂薫れるがうれし  
夕暮の鐘の音聞き古里のこことはまほし城山の秋  
ひたぶるに冬老いにけり野坂山木かけにさけし時雨はかなし

和田 純 乘

青葉しげる城山に鐘一つなりまび五つ三つ舞ふ午下り  
つましくも親子そろひて阪神の水害語りつゝとる朝餉  
伊吹山暮れて小暗き木下道刈草引きつゝ姥下りけり  
流れ行く水に影さす合歡の花螢の客の訪ふを知りてや  
悲しくも又樂しきは旅の身の安き眠につく夕かな  
ぎいぐいとちえんがすれて音すなる五とせ乗りて老ひし自轉  
車

眞青きにましろき雲の湧き出てて綠色なる野邊を旅行く  
霜ふみつ土橋に立てば故郷の鈴香の嶺は雪降りけり

四年 伊藤 義治

試験場自信はあれざなんこなくおちつきも無く足ふるふなり  
球外れて硝子壊せし子等二人こわんゝ來りあやまる姿

藤邊 行 靜

菊の花松が枝と共に我が部屋障子にうつる夕日なるかな  
起き出てて見れば嬉しき朝よ朝晴れ渡りたる伊吹の嶺よ

四年 國島 惠祐

淺みぎり金龜の山に白雪のうすくかゝれる初春を愛づ  
遠山のみ空に黄昏の色深く三日月のほひほのかななるかな  
暗き空に星のむらがり輝きて何故とはなしに秋はしたはし

三上 一雄

人聲も物音もなく更けて行く初冬の空に星輝けり  
何事も總てを忘れ廣場にて球して遊ぶ晝の一時

四年 河邊 泉

夏近し冷ゆる夜頃や耳すまし遠田の蛙かすかにも聞く  
若葉かけ淡くうつれる池の面に緋鯉しづかにむれて遊べり  
黒雲の廣かりにけり我が庭の餌拾ふ雀忙がしげに見ゆ  
昨夜の雨いたくも降りし庭石の銀杏の葉はあまたになれり

旅 中 吟

旅行きは嬉しかりけり黒土に咲く草の色の微笑むがごと  
朝もやのこちたく立ちし山峽の木立縫ひつつ上りゆく汽車  
苦むして訪ふ人多し隆盛の墓石に落つる緑のこぼれ日  
(車中)  
(阿蘇)

城山の木立の若葉にふりそよぐ五月の光の青照れるかも  
夕されば潮みち來り波狀岩に波頭たち小砂を返せり(青島)  
みはるかす日向の原に朝もやのたちこめて汽車は走り行なり  
寝ぐるしき夜船の中の一時を窓邊によりていさり火に見入る

湯本 俊良

枯葉たく焚火はあかく冬空に煙なびきて初霜の消ゆ  
み山路をのぼりて行けば我が袖に朝霧おける紅葉舞ひ落つ  
流れゆく谷間の水に舞ひ落ちる山のみちの月に光りて

菅原 道忠

赤々と實れる柿の下にして黄菊白菊咲き亂れたり  
葉の落ちて一際目立つ柿の實に小鳥來なけり 小さき小鳥  
秋雨の降る音淋しき此夕心行くまで書讀みてけり  
拍手の音淋しくも聞えけり朝霧深き千代の御社  
夕されば刈穂はゆれて月出でぬ野のあぜ道にこぼろぎなくも  
衣縫ふみ手休み給ひし母上の壁にうつりし老の面影  
久し振り故郷に歸れば今もなほ門べに咲ける紅椿かな

上村 文吉

落ちて散る又落ちてちる楓葉の暮れ行く秋を思ひ入るかな  
秋くれぬ野路たそがれのひとこきを靜かに響く村里の鐘

蓮の葉の揺れてすがしき朝風の池のしどまに人を思へり

越 武 和

白雪の終夜降りにし庭の面に初日けさかに照らしそめたり  
春風に静かにゆらぐしだれ梅鶯や來なけ何所にか宿る  
はるかなる旅ゆきごろも野球部よ勝てと祈りし宮崎の宮

(旅中)

朝風の博多の町を後にして遙かに仰ぐ天拜の山  
南州の露と散りにし所かもあはれありけり鹿兒島の町  
ひざまづき薩摩軍人の墓のへにわが野球部の優勝を祈る

三年 建部 恭三

砂熱き人無き濱の晝日中心寂しく砂もて遊ぶ  
濡れはてたふれふしたる野棘の花ついはゆる小鳥みつけぬ  
草の葉の露に濡れたる足下に赤き蝮の死してありけり  
朝じめり小さく咲きし露草の紫なるがなつかしかな

岩 崎 清

天の河、神秘の光、我が顔に投げて連なる夏の夜かな  
遠山に鳴く蛸の聲響き微風渡る秋は來にけり  
秋の夕そよ風吹ける山際を煙一條棚引いて見ゆる  
見渡せば青疊とぞ見えにける日に實り行く初秋の稻

何もなく落ちる木の葉の音までも寂しく思ふ秋の夕ぐれ  
弱々しき小枝のうれを軽々と遊ぶ雀に秋の陽がさす

馬 場 新一

栗の實の頭に落ちてとびあがる寒さ忘れし秋の山道  
霜寒き朝けの道のいくまがりセメント會社に霧かゝりけり  
犬山の城を遙かにながむれば白帆が三つ木曾の流るる  
妹がおゝこはいよとふみにけり三つにわれし鬼の面かな

橋 本 初 次 郎

ミミー泣きたいけの猫二匹橋の下なる捨猫二匹  
庭の土もたげて立てる霜柱ふめはさくく音たてにけり

尾 本 庄 三

マントきてスコップ持ちて隣りの子聲高く出る初つ雪の朝  
廣 野 寛

向 坂 正 隆

朝寒を馬八の字に息吹きつつ荷車ひきて行くなはて道  
宇曾川の櫻堤を通りつゝ花見せし日を思ひ出せり

川 原 崎 仁 一

比良比叡姿を映すびわのうみこれらの山の清くもあるか

鹿 谷 武 雄

福 原 快 稔

降る雪に首かしげつゝ南天の堪へてゐるなる紅き色かな  
常盤なる松が枝てらて月高し國をしづめの神のおん前  
鈴の音もさやかに響くひろまへに清くすみたる月のかけかな

窓 岡 秀 道

永き日も何時しかくれて朝顔に水やりをれば夕風ぞ吹く  
朝顔の花も次第に衰へて涼しくなりぬ夏の夕暮れ  
庭隅でおのづと生えし朝顔のつるをのばして咲きにけるなり

二年 西川 良 造

我が心強く正しく明らかく日輪のごと成りたきものよ

渡 邊 哲 郎

はら／＼と亂れて落ちるポプラの葉はうき手にして妹は立てり

上 杉 阿 沙

野球まけてくしと足にふみつける枯草よそちもまたしをねる

中 川 義 朗

細 川 常 雄

萬歳の聲を残して入營の列車は今や驛を離れぬ

榎 木 賢 三

清らかに今掃き終へし庭の面を早も木枯の落葉するかな

谷 口 勉

さむ／＼さふかみゆく秋藪の竹の右よ左としなひゐるかも  
朝寒にからだふるわせなむれば伊吹の峯のましろなるかな

谷 口 正 夫

秋ばれの野路の彼方のかけうまのびづめのひゞき快きかな

羽 湖 輝 年

七草の粥を祝へば春の香のほかに立てり湯げにまじりて  
校庭の木の實一つの行方をば立ちてながむるこの秋の暮

内 片 政 雄

埃だつはげし西風天空は白雲ふはりふはりと浮ける  
夕焼や西風そよる明日も又天氣と話す親子なるかな  
歸り來ぬ母を迎へに出でゆけばこすえにかゝる夜半の月かけ

山 田 幹 雄

いそかしき秋の取入れ早や濟みて雪となりぬる冬となりぬる